

素焼きの棺を納めた横穴墓群

おうけつぼぐん

あこだおうけつぼぐん

赤田横穴墓群（奈良市西大寺赤田町一丁目）

奈良盆地の北西部に面する丘陵では、6世紀の後半から7世紀の中頃にかけて、丘陵の斜面に横穴を掘削して遺体を埋葬する「横穴墓」がさかんにつくられます。遺体は、木棺や陶棺と呼ばれる素焼きの棺に納めて埋葬されています。

赤田横穴墓群もその一つで、医療法人平和会吉田病院の敷地内の丘陵南斜面にあります。これまでに14基の横穴墓が確認されており、昭和58年度に2基（1・2号墓）、平成22年度に7基（3～9号墓）の発掘調査を行いました。

1～9号墓は、いずれも南に開口する墓室とその南側に延びる墓道で構成されており、その配置から1・2号墓（東群）、3～5号墓（中央群）、7～9号墓（西群）に大別できます。

墓室の規模は、東群の1・2号墓と西群の6～8号墓が長さ3.5～5m、幅2～2.5m、中央群の3～5号墓が長さ6～8m、幅2.5～3.5mで、高さはいずれも2m程度です。

1・3～5・7・8号墓の墓室内には土師質亀甲形陶棺と副葬品が残っており、5・7号墓は未盗掘でした。副葬品の大半は土器で、3～5号墓



赤田横穴墓群の位置（1/30,000）

は6世紀後半、1・7・8号墓は7世紀中頃の特徴をもつものです。2・9号墓は墓道から陶棺の破片が出土しましたが、5号墓の一部を破壊してつくられた6号墓は、未盗掘にもかかわらず墓室内に棺や副葬品がありませんでした。

以上のことから、6世紀後半に中央群、7世紀中頃に東群と西群がつくられており、後につくられた東・西群の方が墓室の規模が小さくなることがわかりました。棺や副葬品のない6号墓はつくりそこなったため放棄されたものとみられます。



赤田横穴墓群の全景（南から、数字は横穴墓の番号）

墓室や陶棺内からは副葬された土器や金属製品が出土しています。これらの出土品は横穴墓がつけられた時期や陶棺の年代を考えるにあたり、貴重な資料となります。

墓室の副葬品 墓室から出土した副葬品の多くは土器で、中でも須恵器が多数を占めます。6世紀後半の横穴墓では須恵器杯身・杯蓋の他、高杯や台付長頸壺などがみられますが、7世紀中頃の横穴墓では須恵器杯身・杯蓋のみになります。土器が置かれた場所にも違いがあり、3号墓は奥壁西側に寄せて、5号墓は陶棺の周囲に、7号墓は墓室前方の東側に寄せて置かれていました。寄せて置かれた理由は追葬の際に片付けられたことが原因かもしれません。『古事記』や『日本書紀』にみえる「ヨモツヘグイ」、「コトドワタシ」は横穴式石室での土器を使用した儀礼と考えられており、これらの土器も墓室内で行われた被葬者とお別れの儀礼で用いられたものと思われる。

陶棺内の副葬品 5号墓の陶棺内からは数多くの副葬品が出土しました。土器の他、耳環、ガラス玉・管玉・白玉といった装身具、鉄刀・鉄鏃などの武具があります。副葬品は陶棺の西側に多く、頭を西にして遺体を置いていたと考えられます。7号墓の小型陶棺の中からは長さ1.6cm程のなつめ 玉が1点出土しました。この小型陶棺はその大きさから子供用の棺と考えられ、幼くして逝ってしまった我が子のために両親が贈った首飾りに結わえられていたなつめ 玉、との想像をしてみたいくなります。親子の愛情を感じさせる副葬品、とは想像が過ぎるでしょうか。棺内に納められた品々



3号墓 墓室内遺物出土状況（東南から）

被葬者が生前身の回の周りに置いていたものと考えられることは現代と変わりはなく、被葬者の性別や年齢を考える重要な手がかりとなります。

奈良時代以降の品々 墓道、墓室からは横穴墓がつけられてからしばらく時代を経た奈良～平安時代の遺物も出土しています。土器や瓦の他、銅銭（「隆平永寶」：796年初鑄）、土馬やミニチュア土器といった祭祀に用いられることが知られるものがあります。埋葬後も平安時代前半頃まで断続的に祭祀が行われていたようです。被葬者と祭祀者の地縁の深さがうかがわれます。



7号墓 墓室内遺物出土状況（南から）



5号墓 陶棺内副葬品出土状況（東から）